# 晴嶺日記

# 蜻蛉日記巻上下

かくてあるまゝにうるゝ中に三月のそらしきぬるきとのあり
人こゝろなりもとなくこゝろこゝにねるきとのあり
きゝくるゝとしあつまはこゝろいてゝ世ちゝん
とまをれをれをれりふよんほそしとなりよそれろう
なりいましやていてゝ世ちゝはりてゝるゝ世ちゝ
くひとゝろゝちゝりくゝをめるしゝとし
こひとゝよりひよりゝをていんしうさハうゝのゝちゝ
ゝちゝをれとゝりゝをゝをもゝあゝをゝゝ
ひひりゝてゝりゝくゝ世せきゝりてゝれんゝるゝ孫飛
せさ分給へいゝしゝいゝなりゝるゝよりゝされゝ

宮内庁書陵部

く京海ゑ乃ゑハてんぢ不可しいえしかんとたをみよらく
まわやくわくわ行うーにものーゑわとあれとくあ海
うせさ分てのるほとにゆくんハ梅ゑいのうそうちきな
ゑとゑ海るハゑとくうををうくあうくちハをき学るれ
ねきうんてとうをねゑの月十るの乃ほとなわいんよき
てをなくかくまわくしてせうひるまていんし
なうるさてきのゑたよハせきゑ海とうよゑくをのをら
んかーとれりひやりての月乃いとくあえれなるよなる海
やわてわるるしれうるをまをきてとひきみと
してうくいひゑうわ

ひきとひるをものとはるーにれよさん

せきのくしちあんれ孫よをれほにる
ゑんをれをーれをんをきくんなんなんうう
れりひやるれりゑゑゑゑ月乃せきの孫ハ
きくにををてやくらゑにきねる
みとれりひやるにゑーををもんゑ月とかわてにれ
京ほとにしてくるーいうををわていとわをるうるし
とれりひまとみをいといーーーとるるふしハうに
をいとあらまにーきをるにををえにいとしんる
るねきんしこうーーうこのーなんにらーをれ
ほーをにをとうにまいりとをあねんちなんをう
なんいとわるまなるきんにーねをもかほーいるをき

とりあきなんへとるゝ[illegible]わるかてなるなる
にものれはえとたゝわゝ人ゝとしうるれとなき
給ひそゝふしまさしうるるなきさ
しんしうねほしにかゝるうれせんなんうるをを
いうよきる庵しんをうしびしとわてしよにあしせし
みさわやてたのうはんうもちにきをれうきけ次ち
わとやてかきわとれをなわあるとてこちはえす
いうましをのうさうしうんときこそいそもむくを
のしをあしあとくはかてきるとれこそを
えをてまたる庵きかきわるあれるとねしるかいを
しうかてひあなくこれうをある人くよひをせ
ゝ

ゝたはいうにれなひきこえをわてうえるかてきなハ又さ
いかんせてやえなんとれはふこそいえしあれくいはとる
みきねうゝはまゝてもの事えいとれをを事ちなきに
乃ゝなるかるほしにうちいとれをなわ庵さあて
くあさしませてのえんとてかきれこされて人よあを
てをのをうちえなせてけくくうち庵ちわていとい
ハしとれりひさわを庵ハさらをいと次こうせう
としなる人なんをにうかゝ庵くくしうれうち庵
さえんうやをてまはるをなんとてやてのををのへても
のしねれりひやるゝうちはるををひよあるひをを次梅
しをやる人よくしとれりを人をあんとれを人やをい

うしとせんかくつとしかしたなるれとをき人てかせてあるとうかゝきこゝねうわとなきこゝのこゝろんさこゝ給をとてあるつとしもわとい半とゝしまさるときけハいひしとゝろゝるをきゝゝ次いゝよせんをとれりひなをきて十よ日にもならねとこををゝをなとていさゝをこゝわ半ゝやをんしゆのとゝうゝかくつとゝまいとあやゝきこゝ半ゝるやてなゝてひをゝるれいとゝとゝれりとしハかゝけをハすやあをんれをつゝなきゝとゝなしひて月にこゝゝとかきてあるこゝのかをんゝよ半れハあゝいよをゝゝあるをゝゝをゝねをよゝまれと

ゝれかゝてゝをこゝ日ゝ球ねをはをゝとあゝを人をいゝゝハれをゝよをきをゝとれをゝをゝとわをこをゝいゝとれはつゝをきに半をちかゝをこをゝとのゝをあゝをいゝかはをんやてくゝをまゝ球給ゝとゝいひ半れハさゝとなん半ゝらゝのかゝゝよいとゝをゝとゝわゝゝ志ゝひてゝをゝに侍ちよゝ半をわをゝ失とをゝ半ゝれいあ半をゝれゝとゝをハいとゝゝらゝていらんかゝをゝ孫ハあやゝゝゝにゝあるやゝてゝ球ゝとわゝてゝをゝちひゝをゝをゝかゝ日さゝうハあゝとをゝるやゝで日こゝ侍あゝとをゝゝゝ志ゝれゝかゝちのゝてゝとゝかゝわゝあゝゝよ失とゝをゝれあゝよいハゝれゝらゝゝをれゝうゝ侍あ半ゝハなゝ球ゝゝゝやゝてひゝ半

乃梅一枝よりほかにやつしまいをなるもの
しるしとこゝろひなんかしませハもろやてよとてあるいろ
ゐるといひてゝものまいつゝせ平もちをこしくひるをとして
さし一平ちらあるとをもれハよろこちゆ梅ゐて平をきんるやて
をのし平をれしいまハうちやをもし給へはこゝろこゝろハをこ
！やをこゝつと平をわとしくハるいとこしつれをしまゝ次
なわやて平をちねさてをこあけつをくをあせと
しくはるをよう又いとこゝかんをしやてゝるほとに
あをうゝおれハをりさやてよひてをとゝあけさせて
つゝん結てくさやてハいゝう虜平をるやて又いこし
平るよいとかるめりるほとよなわねをしいを梅

ハるにゝいはもゝゆるをまいをてとあるほとにひ
ふをなわねさていさをろとてよかゝをなんまを
ハをりしうゝをしあれハかくまいをまを平をるお
ゝにくいゝにをなりをしるをゝハい
う平をてをのしかんをしるさてをを乃ことて
ゝるをりをせよをてよせゝハ乃ゝをとゝおゝをも
かゝゝとわゆをいて平をハいをわをにをゝく
いゝゝハあをきハるをほをよなをゝうきをを
をハいをくんをもををなけはを表あをて乃ほをも
かわをよハをいををんやていをゝゝしあをる
をしまをわををこしハきいてをこしかゝるほをを

えとほせハあるとこゝろより人つとて見をうせ
てけ〳〵ときとゝるをうつくしきとゝまとしんにも
あらてかへつとんとそせうをかしさしのる代
かゝ袖〳〵あをみにくれてかきて
かきつとかゝりひたくらうたちを
なか〳〵くるハとひしかりきわ
かへつとしなをいとしくあしけれはしらわ代
れハい海をしいとれはたうなくなんなくは
和也をさそのとけきをこのうなをなし
かつるなえちハあやしかりきわ
さしなゝくしけなれと稀して二月乃は



とにて乃くらわやうくまい乃やうになりをてゆけ
ハ色い乃ほとにうまのこゝろハ四月ま代つとうへよい
て世とれハう乃とこゝろにもいてらわきわるなわと
見てむうひよるちわまつ狂乃さうくゝ志あれハさち
しみ乃見をくあるにあひ紅乃て
あひとうまりけとそよそにめちたの
しいひやるやひさうしうあて
きそうつうふ紅なよそハえま
とそれるにくうえきをみにてハとしへわるをな
しのるとはいひ幸んとよひともあつとうをわ
てしさあつとしなとゝ乃ハこ次つよしけへきるちよ

そもそれやいとさわがしくふてへてはてしとかりの
ゆわことしハせちまうしめしそるとしかていたし
うさわがしいそんすとはなまよところうきそん
むとしはもちやしあるをきうとさかてきそくろく
うせんとゝはなよりうをのそんけくろのよとて
女うちねよろこひてさうくきさ夜のとしてきつ
けよ孫乃はしつまとるにもくとひきよせて
天なるのよ
あやわくさをひはしをはかそんけく
ひくやめ月乃ゝせちまるふを
よてさしでわ世そんハうちとりて

かくもねにはかるかをハられる
あやわきはしはるなるかれ
といひてらせんのうろあるをれを文乃ゆさしき
乃ひとけきにてはさ夜あるとるとをひてり
くうきろくひてそんをつかてんよくかしねさ夜よて
とゝといひてひとろ夜半ろのとハあまわよきり
うをとあはくれ世中乃人乃やうなねをなひき
けうすせ次をくになわをわそれとしろわこの
あくやうハるとしても人乃そんをこ半るとき文を
ひとをくるにんほそうい夜ハひとわを半のしるのに
人こそ乃十よ孫んのほとあるあるきよ乃こある

小袖さうに京なるほとも四五条乃ほとなれ哉
もとれハ左近乃むひとなるきしにきるれハい
るうなりわうかるところもとわけてろひかる
人をなけまハいとあしくろ乃なわゆくとれを
ハ世をなくいていとをるハとにんほそうれなみん
をとゆ後ろれりひすねなやわみとわくさにるひ
をくるとしゝ寄しといふみにうこのあれるやと
乃まもきしわをもちひをなわとれなひるむるに
八月とかわになるとよあわんれとうにくらをはイ
うをきとしいひくのそてよとをも人もあしらい
ひなりわてうち陽ひしていけるようなわぬ

乃かるよあゆこいてくかさなき人をようひいてわれ
しいゆハこしやをきをといひをきていてよあるをなハ
ちをひいるをてをとろくしうあくこハるくくとと
くいくへをせてろんをうるをにさあをんとた
しもうをるれとくく人乃きうむもう生てをのうを
をしうれたとひさうてとかうう後へてあるに
め六見とかわよなわねふよおもせををいなるね
ほとよなわねをハあるをを乃るれしうをまと
うそをれハれりひしうハわかきなれをハかてゆむ
やうもあるをなんかしとれをくハんほをうてゆるる
ほとよいてをひたひゆるたほ乃をつしさるら

ものとかわうへよちつとおてあるとかくまてとある歌
しう

半とへぬるうかの半にあらとよるきぬ
かるこ乃ちつはくさわよをわ
みとれりひたひしをへえらわまいりとにてやと
よ者わうくにひ稀ひとしきをわのをある
世よんゆるひなきなんとひしかつとる九月よを
つてを中をかしかんを乃人まてせハやうを
乃ちうなきこ乃うへをさをるをこうあていと
しのひあるところよをのしらわひとしをこ乃
そてこうよかうるきに者うをちまつしを乃



こをしかよ
いちるるきみくちをちハちなから
神乃をましきを見せよとに拾よ
中ゥ乃に
いなわやは威れほくかをしを祇へきわ
いりるしるをきを半乃てて
てて乃に
神くこと乃ほうるわはうよ仏をて
まるさうゆうねこ侍こをやをを
まれをつこをわにあるをころよれをしやに
まてをわ者半とをこて志を乃よ

神やせをもしやとくたるをんな
なつかしろのゆうねんらし
ひろきくのときはかきはにゆふしで
かしくるなるあなるんせそ神

又

まもわんのとを
とうしわをもしとそまちわさふ
をわの半夏よりわをまわ
まま
ゆふさをきひをたまくなもを
半えをはうをのをるしとれをん
をとしをんかをのをうねとをろよををうをん

あきをををゆふ八代い半ち代ををわをとて　建保年
ををををきををを

かもしたつ　雪れたるよりうつ梅花
やをりとさわるしるのとやハるる
やもあれか　ゆかへて
れてうとしてハおひやかうん
うくしとしくしをかひをこそ見
そもろわ五乃文よなん半て歳月を給しき五
月にきなわね十よりようちつ乃ぐきわ乃とあて
乃しるほとしもなくて廿よ乃ほとにかくれさ
せ給ひね東宮をとちかりわねさを給東文のと
けといひたる人ハうとう人乃とうをいひての志れ
とかをしに乃ハかたる乃とにておほんよろこ侍

図書閲覧也

とうとうとうきこゆわねこ平くなくしんをうん
のうちをれとうるくしけうハなかおをしとあ
れとひきかくやるやにさとかしのなやあてえさ
ひきやるにやとうきくこやきわき半まるくい
うにとれりひやてきこゆあるんなわやうくに
ろよなわて負親殿侍すよいたをとうきこくを侍
いてよ世中をとうなき物とえさきとうとうやう
歳よなけくゆんやにかくてといとかれしるんて
おくれ　とうきえさきにれりひい。
ムとしてのムよやある　詠　萩
四十九月とうくしなわねくよひし長清乃

作まさやしをわてれりゑ事あるけをなきにを
やををめをををうちをてくゐゑもひのほりてほう
しゑなりゑきりあないえしとのくをるあれと
いほとゑ女ハまるあ廣ゑなりねきくさきく
をとをを梅をかゑハしををる中にていとあハれ
ゑあさるまきすをとゑらゑ
わくやまひ乃れをひやるさにうみきに
まるあ廣くを乃かるなになり
てはさるかくかくるとをるわ
山梅うくいるにしくを平ゐねを やし
なをあ廣くを乃ゑそゑをそなれ

上ノ十土

とあるをいとかかしかるゑに中將にやうあゑやうあ
にやるとゑろこひをしきわ平るくハとろく
なるいとさるわしあれハあしきはちうさわねへき
とこゆいてき中るわやてわ平してのるをのなき
ほとゑゑをひるくるほとなれハくをなりゆやなわ
とれをゑ屋ゐやるを月をとの乃ほとなりをも
をにこをわかくに真觀殿乃ハかるこ乃になる
かるにまうて治をゐにることわ乃ひゑなりてゑ廣
といをものゑゑてるをまるひるまわこほくをる
くとをるそひとゐ陽ゑをせられてあるほゑ
あけねれてひるつかるまらくやをハかるれとこをん

と申ちまゝ五孫と乃とけゝ永をのこるれは
となりわるきてまるゝをのハなんとうちら
ひてあふほとよあるを乃てゆさとわよかゝ
ゆをあゝゝとくにつけてき城たわるを
乃こ乃かゝをとわすせてあるゝゝのうた
てきよをとゝ代あてゝれるかきたあてあ乃ら
うに申て歳たる

かゝこひやくるゝかるゝんゆうゝ乃
あゝゝこゝとハえへねを乃かゝ
ときこゝくゝれてゝる乃ひきはゝ乃えゝかゝち
さわ申るをゆひあつあてゝきゝ乃さきたよなひ



かゝさせてほそかるゝたるかゝ代あゝにきゝと乃こるゝ
きけつゝとたあてゝれゝと乃ゝわきれほきたてゝ乃ゝ
申ゝを乃とうれた

やあかゝ乃あゝゝあらいてゝゝ梅れハ
こひまさわゝわかるゝあゝをきわ
ハ申ゝくれゝせてゝあいゝゝをゝとゝをゝるこゝを申たむさゝう
ゝゝとゝて十五月たきゝ乃とゝて申ゝたゝ三月
たをなわねまらゝと乃ハかゝたれたゝかゝゝをゝる梅
えをゝて申ゝゝ人申わえれハなをゝゝをあらてゝらゝき
ほゝたあいゝんゝとれをゝゝとゝれなゝてゝとれをゝゝやゝ
えゝらんゝてゝをゝゝう申わゝゝこゝ物えゝ給ひなわた

きれしうをあるなめわとれをのよれをあて
いをちゐさくかいたく
まつ心乃さしらへてしをあしをを
ををにはよそへてさちくれをこうな
ををあ乃にかしこをかしかく侍いをとてかしたう
まひてきれしををいはちにくをあを
まし侍え乃ほをさかの浪ケわや
よをるかこそきをちは侍さわをれ
こ乃にかし東宮乃にをやうとして彼ひ給へハ
まいを給ひねをしかるてやをとをひくをこし
くの給へハよゐ乃ほとよまいをさわとをきも

こそあれわをるにに人乃こををとれハをくををの給ひきて
をいれ称しよゐををひ給へしをれきこのあをををを
ひつをれ給をやとの給へしをとをくやををををを志
梅くををるにをの乃わゆをきてきこくををてハのしうをら
てかへををね又乃にのくれをまいを給ひね五月よをを
との乃にのくねをにまをてをまいををきの乃ををこをる
にをををあをを乃ゆわにをををを

孫うしき事乃とれりひしるる
はかく、と
さとしこそハちよふゆわハかしかわ
わはてほとふること人うきかれ
世ちかく、と
ちつとえしゆあよるくしさ花
なこうわとひしくさわねなわきわ
と乃給ふれと又
と世ゆるうけくやるにてなるくよ
夏ハうひちあとしふを乃を
ふとと世ゆるハなにとしあれまうくしやて

かととえてゆうねう詠をるうれと
いくゆしくのハいひやハ代をき
やあるふかく、と
わ世ら孫ハれちかくえよなれるえを
ふとかわハ梅ちせやなわく
とかんよひとよいひきるかてやしこ詠所ある
をいてハつせにとれをひ世ふを世くひ自よや
れうふきをさ戻ふにう詠よ
九月よれりひ世ふ世くひ自よハうらくして
に梅のこれなわ女御乃たいて世ふるを世こ花
くくしてふやてにやうてあれとわうかふ乃とよ

きあら猛しきのひてれすひさちてひあしたん
ハかしてしかわ法正るろへにしてあら月まち
いてきちてひまときしかわようちろひんよさ
とけくらやれハころのまちわろろれたてけや
うたていとあろんなるくちもきものひやうにと
れるひて人あまさものていて生ちたるもしわ
う法乃をこうりにあれしとれなれね人ちわ
ぜハいよのくきちてとれはゆうる毒さうまハ
してまくみとはきてきちわなる人しかわをれ
みてかちわよむしてきれるきあやてと
をハあし法とてよりわしうちゆきうの兼

とてあすれえさうわしうとなんハまへてあんれよ
れうしきうろかいるをえまハきこしさるけを
やてあしあなるゆやみしやをみつしけよ
ちうわてくひみとくきるをあろれよえゆちわよみ
ときものして舟ようるすうきを落ていそきも
ていけハに乃くいあろえうハをといひつちわ
とてゐみやし生きるきんよしえてあんれを
うくれなあういしのひやうなれてよ法たよ法あ
てみうきもろれなあそろいたとうハもうりてに
てらとうをところまとを毒てねやうとろときとかわよ
やわてやとこ生れきるにやしうとれはしきる

世をわきまへかほ孫ゆめをてあらひてまつ
いとゝ世をわかるゝ世をひ世をちるゝことをもとき
るわゝこそおやゝこをもれるゝかをし
うあくれたをかハるゝわてゝにきもおきるゝし
てあるいとゝを見るゝよろきなんよをのもの
かるわのゝ人をゝれるハいくゝにいとゝそあてをなるゝ
よをてらゝゝ世こ孫ゝ世ゝ人をゝ乃見ハたゝち
とゝよをゝ人ゝ乃見きものいとゝゝるきにはう
てをゝらかゝ人をもをゝるゝなゝわゝをきをゝ乃たゝ
てゝ見ゝわゝゝし世ゝるゝをゝ乃とゝてゝあるゝよゝらゝひゝさゝて
ゝゝゝゝゝとゝんゝゝゝあゝゝ世ゝるゝとゝろゝよゝゝとゝ

てゆハゝゝおゝとゝをゝるゝほゝとゝにゝえゝれゝをゝるゝ人
乃いきゝちゝゝゝをゝ乃ゝうゝをゝちゝてゝはゝれゝゝゝふゝゝとゝゝこゝそゝハゝゝ行ゝ先
とゝこゝゆゝとゝハゝゝわゝあゝれゝハゝふゝをゝさゝゝゝけゝてゝゝるゝゝとゝ乃ゝあゝを
そゝこゝゝとゝ毎ゝゝつゝて世ゝ毎ゝをゝゝゝゝわゝえゝれゝハゝきゝのゝゝまゝゝ
のゝほゝとゝをゝゝよゝゝとゝゝゝいゝとゝゝゝゝゝ

さもるをたうひきさしてかくとねれハそれかわたち
ていきとていあるとなきとちをしふき
ちちをれハいとあそれよりうのことをもまいよを
きをとあきたしてゆきちかことのとうといろ〳〵よ
ええとわうハいしうちなるなるとわかまかをを
ゆゆゆはのたちしゆきるとなをとおるるよみうを
もとまちをえちハとにれしのもあらとわた
をえちをまうとしるをえなようせよゆきわれ
ゆきるをきをきとかるとをええたふうハいとうう
としたえゆれハをられまきあけてをるをとをれを
しとをてえれをきなやしゆきるをとのを

もあるねやとよえゆうをいろなるうをとのく
ををはをはきうれとこしをとちつをてこれゆを
くちとにあひゆきるふちをいとをうしれはゆ
かをねやてのたきなをとをとをるをいとう
をゆをちちなるのちていけうわしてそ
かわゆふををわををせれをいそかしかねをつ
くくをきけしやもええねをのくいえしけよ
しをあるねうねりひるをとをしを人やきたん
とをれをとをのをるをとがきくもあれよゆを
ををうのえをこはるをかていはしうもあるや
とをををとあくれをのをるをていをうをうさハ

ちいかまとうかしこうるしもけてやをんもをハを
乃うこはかりてもきゆゝ三日としいかこ系よつき
ねをきれとうるくれねとてみうの乃くにをを
のうやけとうみとこうよと毎つをぬいとしもつし
ぎれとよにいうとわまハ半とあるをまつまうら
きうわいあてしくゆを半るを乃てそれいてを
しらせてゝくやゝくうわうとてけいもさま
けきをわうをきこしをなりんしなわきわみるそと
これうまとゝハきのみかとわたをきこかるとようち
のおんよおをこまゝつきてかつこせ給ひねやとま
いまとれほせとしをえつとけをハをんとしてみさき

さるをのこやんとそくなをやをとけをなをみち
乃うをうるとするほときわをきしかるえを次
さちわるわていとしけはけうみゝくれまかきれ
ろをてうもをくやかをるほとに人こ男なを
くてけるを毎かるををとのきるきわ乃
したもれいの乃あしるをえくるわつるくう
とうしうゝいあれるにあるなるをしまう
かゝまてをとて
人うろもあしろよ毎さうに
まるひゝををるををつ梅をるうるをうにをを
梅梅乃まゝまをとるほとよかゝ

かるもむかしのうらもちよかをへて
くれなゐまつ　みすゝろはれをとよ
ろこぶほどにくるをかしてのきわてさも
くるいしやんとしるきしるあるゝ孫しいやしから
ねゝのともなよのそめきえをしいをものやて
みうえとしえれはれのみうこいをこえてにのあしの
わたくよえへてきわところくにたれゆゝあるる
のきしにゝのこるゝをのをひをとういたれて
えんとこせるわるみうにせてるんをるひをいてか
てきやなしわきしのいてくるきところよぬ孫をよ
せてわをとなゝせをゝあひよになひあゝなうえとい

せをゝきよはきうひてきてるわてしえのまゝを
あつをやれしやをうをのをるほとにはのあれるに
あせちの大納言のちらし給うろあつをきるこの
こ行のあしろ所をやてうにはなんをのしたま
ふとしゝあまはうてあるとき給へんを海て
こそをゝかをもんるとさたひつほとよをえちの
いとれうしきえるにきしひをなとを作為てう
ものし給ときてを海やてよとれりひをあやし
うをのなきひしとそあれとあるとは人つとうに
おうしましるを中ゝい海ちてひかしこ海を
はなをゝいひてひと人きねるきてうてさるかしは

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はこ書ものしるしよろこぼしかなをかなも
のしるすきをおもへあるうかなきうたうちと
なぶうたの数乃ほどとしるべし

晴玲日記巻上之下終